

南方（フィリピン）

比島散華

兵庫県 松田 勇

私達は今、さいわいにも安定した生活をしている。しかしふりかえれば青春の時期を一にも二にも軍国主義さんびの世を送らされた。亡き多くの戦友は終戦後にいたるまでの悪戦苦闘、そのうえ飢餓の道をおるいたのだ。国にむくい故郷をしのびそして家族をあんじながらも必勝を信じて異国の山河にさんげしていった。忘れようとてして忘れ得ぬにがい苦しい行動体験を記憶をたどってここに書き、亡き聖靈にささげます。

「忠霊塔に日の丸立つ」

第十師団出動命令の暗号電文です。時、昭和十九年七月二十八日。八月四月駐屯地出発、いちろ満州鉄道で南下す。同八日釜山着、十五日出航、門司港内に二日間停泊、もちろん船内のかいこだなに缶詰状態だった。

「外見厳禁」、十七日梯団編成出港、台湾行きを発表、二十八日基隆入港、その間船は東西南北と航行した。なかでも鹿児島湾に二日間停泊、そのとき退船避難訓練で飛び込みの練習をした。

台湾全域が師団防衛区のため全部隊が分駐配備した。師団司令部は台中に、我が隊本部は南四十キロの彰化街にちゅうりゅうした。十月十二日台湾海空戦に参加活動し、十二月十三日高雄港より比島に出航す。師団先発船「有馬山丸」でレイテ島にむかったが、時遅く上陸を断念しルソン島マニラに上陸を目指す。主力は「大威丸」「乾

瑞丸「江の島丸」の三船にぶんじょうし、ルソン島へむかった。出港時より上空に九七式飛行大艇（四発エンジン）が最南端のガラランピの灯台まで警戒をしてくれたのもしく感じた。

バシー海峡波高く、日夜空と海の監視は大変だった。一升瓶の波間に浮かぶのを見て潜水艦の潜望鏡とみまちがえることもありまた食事も船酔いでとれない。舷側にかせつした便所は用を足すとき、荒波に尻を洗われる。これが本当の水洗式だ。かくして二十三日「江の島丸」は北端のアバリに入港し、「大威丸」は北サンフェルナンド港に十時にとびょうした。

前日より機関調子悪くすこし遅れていた「乾瑞丸」は北サンフェルナンド北方ダンケヨス西北四海里洋上にて敵潜魚雷三発で撃沈された。ときに十一時三十分だ。

「大威丸」乗船各隊はこの時点では分秒をきそって陸揚作業のさいちゅうだったが「乾瑞丸」の爆発音は耳にした。一瞬にして水くかばねになられた輸送指揮官鍋島部隊長以下多くの戦友が一番あわれだ。我、敵がいにこもえたり。

「大威丸」下船時に大隊副官より

「松田、上陸後は別令あるまで大隊長のそばを一刻もはなれることなく従身せよ」

と厳令を受けた。正午ごろ軍と師団の参謀が港の砂浜に各部隊指揮官の集合を命じ、現況説明と作戰命令を伝達された。輜重兵十連隊からは我が大隊長が出席された。一歩後方で砂上に書かれた地形と作命をはいちようした。いよいよ決戦のときだ。生還はないぞ、血がさわぎ、身体がむしゃぶるいするのを感じた。これから二十二年十二月復員するまでの二年間、生き地獄の戦場とくつじよくの捕虜生活が始まった。

海没した「乾瑞丸」の救援のため第四中隊の一個小隊の車両に各部隊医務関係者、医薬品、警備要員に歩兵一個小隊が分乗して三号国道、北部ルソン島西岸線を北上のため、十五、六時ごろ出発した。夕闇せまる道路上に街路樹が倒れている。排除して前進。また路上に障害物あり、そのつど歩兵は散開警備し、大隊長は自分のほか五、六人の歩兵と海岸線をそうさくする。闇夜の浜辺でラッパ号音が最高の信号となる。力一杯ひびく音に何の

反応もなし。北方三十キロほどきたが、反転し引きかえした。

いま通った道路にまた同じような障害物がある。米比軍ゲリラのしわざだ。攻撃はないがぶきみな状態だ。東の空のしらむところに海難の浜辺についた。赤ふんどし一本でたおれている者、重油をあびて全身真っ黒になっている遺体、手足のない人、腹がやぶれ内臓の出ている人、後頭部が割れて脳しようが飛び出しながらからっぽの遺体等々その惨状は筆舌につくせない。自分自身がいような精神状態になっていた。我にかえったとき、思い出したが、昨日早朝に食事をとっていらしい一昼夜、口に何も入れてなかった。

サアいよいよ本任務に全力をつくすのだ。港湾で敵機の襲来の間隙をみてのによくは骨がおれた。各隊へ輸送、積込みの指示等昼夜の別なく走りまわった。によく用の木造小型船が山口県宇部港からきていたのに驚いた。「栄豊丸」という。親子二人で船と共に徴用されてきたとのことだ。

おやじさんは平気な顔で、

「ここに来るまでに二度も三度も飛行機にねらわれました。そこに機関砲のだんこんがあるでしょう。お国のためです」

と一生懸命陸揚げ作業をやっている。ただ頭のさがる思っていた。

大晦日がきて、迎春の準備に主計将校と市場へ買入れに行った。日本人の口にあうような物はない。そばをみると甘藷がある。口してみると日本の薩摩芋とかわりなく味もおいも同じだ。これを正月のいわいぜんにすべく購買を申入れると、なんと一袋一万円で、計八万円だ。本部金庫に十二万円の軍票よりなし、残金のことを考えず買い取った。この頃、比島人は日本軍の不利を察知し軍票の価値なしとみていた。

「北サン（北サンフェルナンド）の

藪に芋焼く初日の出」

米軍も元日は休日か、爆音も砲声も終日なし。あけて二日は早朝から爆音高く偵察機が超低空できた。地上からは高射砲、機関銃で弾幕をつくる。そのなかを勇敢にも飛びまわった。

各隊はそれぞれ任地にふじんし陣地こうちくにちやくしゅしている。港湾にはたりようの軍需物資がやまずみされわずかな警備要員だけだ。我が隊は全資材輸送のため昼間はいんべい行動をし、日没からふつぎようまでがフル回転だ。この港の南側にポロ岬という幅五百メートル長さ三キロぐらいの半島があり、南港も波おだやかな良港です。

暮の二十八日に三隻の大型船が入港した。兵員よりりと同時にグラマンの大編隊がしゅうらいしものすごい爆撃をかんこうした。地上対空火器も少数ながら応戦した。私は所在なく高射砲陣地の空壕に入ってぼうかんしていた。被爆船は弾薬燃料に引火し大音響とともに真っ赤に燃え、外板がペラペラと海中に落ちて龍骨や肋骨をみせながら沈んで行く。この間三十分ほどだった。

一月五日、サンホセへ転進せよの命あり、残存物資に火をつける。残念。甘味品等を持って指揮官車に乗りこんだ。操縦手は満州の原野で十分訓練した腕自慢の戦友です。夜道でもどんどん走った。五号道路の要衝サンホセに到着、師団司令部はここにいた。我が隊は奥地の盆

地のようなブンカンのその奥のビノンへと進み、川原の山かげに満州からけいこうの八錐形天幕を張って本部とした。

マニラ、アバリ、北サン等の軍需品輸送に全力をけいちゅうした。私はこのとき台湾で罹病した熱帯マラリヤに三日熱が併発し四十余度の高熱でなれば人事不省のごとく記憶がうすれ、無気力状態だった。

早朝、五号国道へ出て見た。路端に木箱が一個、他隊の落し物と持ち帰り開いてみると軍票満杯の金庫だった。今の私達にすると金庫一つより弾薬糧秣の一箱を尊重する時です。これは無用の長物と河原に穴をほってうめた。各部隊が国道をしきりに北上する。もちろん戦火をのがれた在留邦人もぞくぞくとやいんにまぎれての行動だ。北部ルソンの穀倉地帯カガン河流域へ食を求め、軍の庇護と安全のための移動です。回顧すれば邦人は早期に米軍に抑留される方法を取るべきだった。

二月になった。バレテ峠を越え、ヌエバビスカヤ州へ足をふみ入れた。後日比島における最大激戦地になるのだ。峠の北側登り口のサンタフェノの川を渡った峠のう

ちぶところの大和谷に本部を設置した。自動車大隊は東北二十キロアリタオ街の対岸マンガンの山麓を拠点基地とし持久戦にそなへ、自動車壕を掘って格納準備完了。輸送物資もとぼしくなり燃料も少なくなった。軍馬も寒さには驚くほど強いが暑さには弱く、満州からの軍馬は全滅した。道路事情が悪く自動車の走れない道を自動車の兵隊が馬車両に弾薬を積載し引っぱっていった。何度も何度も積み降ろしをしたため丈夫な弾薬箱もこわれて砲弾が鉄のかたまりとして一つころがっている。一弾四十キロもある。これを前線陣地にはこぶ苦勞は大変だ。巻脚絆で徳利むすびにしてせおい、ジャングルの山も谷もはいながらすいこうした。

三月六日、第一線妙高山陣地に出撃命令がくだる。自動車隊は後方長距離輸送のため、ゲリラ、落下傘降下部隊等の奇襲にそなえて常時歩兵訓練をしていた。そく一線歩兵隊に改編出来る。高射機関銃を受け取り、修理班機工が脚をつくりなおし地上用に改造し従来の軽機関銃要員をもって重機関銃小隊を編成し第二大隊本部、四、五中隊及び六中隊の重機関銃小隊で、自動車男の花道だ

と勇躍妙高山へ出陣した。他部隊は一か月前より陣地構築をおこない迎撃準備や完了なり。自動車大隊は一線布陣後、翌日は米軍M四戦車を先頭にした優勢な敵部隊とそうぐうした。かくして五月三十日まで死守せり。

マンガヤン残留隊は他隊よりの補充要員等で修正七中隊を編成、輸送及び後方警備す。燃料不足で走行をおぎなうため優秀な機工兵の考案で特殊装置をとりつけ走行可能な自動車をつくった。ドラム缶を荷台にすえつけ、これから銅管を排気管をとおして加熱し気化器に注入し機関活動させる方法です。力は弱いが運転はできた。燃料は油と名のつくものは重油、軽油から廃油にいたるまで使用した。ただ排気煙は物凄く後方二百メートルぐらいは煙幕を張ったようだった。点火栓やその他部品修理用具は常時携行した。輸送任務時、急坂等を想定しあと押し要員を二十人ぐらい同乗させた。

パレテ峠天王山へ弾薬授受輸送は、登り口、サンタフエの橋梁が落下してゐるため川のなかをとる。峠の向うのミヌリから米軍が夜間定点砲撃をやる。手前の山陰に車を停止して弾着を調べる。時間をはかって十分間隔と

か十五分間隔に何発かをたしかめ、着弾するとエンジン全開で対岸にわたる。このときあと押し要員は川中に先行しいっきに車を押しあげる。最大の難事ですこしの時間の無駄も出来ぬ。全員死に物ぐるいだ。数車両の時はなお大変だ。マツチをスツテ時計をみたら大声で怒鳴った。渡河し急坂のヘアピンカーブ辺りで頭上を弾がうなりながら走る。首が自然にちぢむ。足もとの今渡った川のなかにドカドカと弾丸がつつこんでいる。あと一瞬の静寂、さあ出発だ。昼間の爆撃で一屯爆弾が道路の七割もけずりとなって大穴が谷底までつづく。山がわをツルハシとスコップで整地し、やっと通過した。

すこしのぼったところに両脚負傷で歩行不能の兵がはっている。「帰りにアリタオ兵站病院へはこぶからな」と声をかけていく。途中某隊の車が二両おりて来た。特に注意を喚起して交差した。

任務なかば遂行し帰路につく。力の弱い車でもくんだり坂は快調に走る。負傷兵地点では前の車に収容されたかいたがなかった。大穴地点で驚いた。さきの車のわだちこんが一直線に穴にむかっている。穴に落ちたのだ。何十

メートルもの谷底で声のするような気がするが、救助する手段もなく東方の白むのを見て、心を鬼にしてとうげ道をくだった。

渡河地点は往路のくりかえし行動だ。サンタフエ・アリタオのなかほどのボネで夜があげた。

道路走行は不能だ。搭乗者は徒歩でかえれと指示、操縦者と二人で車を橋のしたにしゃへいして日没を待つことにした。まもなく偵察機が飛来した。間一髪のしよくだった。後日判明するが、当時同地域はゲリラのそうくつだった。マンガヤニ基地から連日連夜各方面に対しての行動があった。

バレット峠西方サラクサク峠は撃兵弾（戦車第一師団）の主陣地でここには歩兵三十九連隊第一大隊と搜索第十連隊が配備布陣していた。後方山麓イムガンまで道路が悪く挽馬車両をひっぱって輸送した。またバレットの東、旧スペイン道の鈴鹿峠に兵一人と連絡にいった。アリタオで渡河中にロッキード戦爆機の編隊が頭上にあらわれた。河のなかで釘づけとなり首からうえを水面に出してジット見守った。マンガヤン基地の西隣に撃兵弾の軽戦

車が数両いたが、これを発見して砲爆撃をかんこうした。約十分ほどだったが実に長く感じた。

戦車基地は大火災をおこし一面焼野原とした。広い河原を早がけで走った。途中一つ村落がある。ここで比島人の婦人を初めてみた。

四月二十日、師団司令部要員として一個分隊派遣を命ぜられた。経理部のさんかに入る。任務は前線糧秣所警備、黒川谷の最奥部でやや平坦な地にアンペラを敷いて、そのうえに小山のように現地米が積みあげてある。かたわらの斜面にし字形の横穴をほって哨所とし、なかで全員休憩出来るようにした。

第七中隊から十人きた。氏名は忘れたが一人歩哨係、上等兵が病死したのでいちようにほうむった。水利用く二百メートルもおりて急斜面の谷川で水くみだった。危険なため何日も私が全員の水筒を持って行った。昼間、主計中尉の指示で各部隊からの受領者に糧秣を渡したが夜は大変だった。一人の立哨と一人の動哨が各々一時間交代勤務した。他は哨所にひかえたり仮眠している。

歩哨が

「敵襲です」

と叫んで壕へ飛び込んできた。

「馬鹿者歩哨が持場をはなれるとはなにこことだ」

とどなって現場へ拳銃片手に飛び出た。地理はわかっているが真つ暗なためころびながらジツトみきわめて、

「友軍か」

とすいかする。ややあつて

「米を下さい」

「よし出てこい」

といつて近づき

「米をやることは出来ぬが貴様がとって行くのはかつてだ」

喜んで雑囊軍服の上衣とスボンのポケットにも一杯入れて帰っていった。小さな声で部隊をたずねると

「○○隊です」

と答え敬礼をして帰った。昼間の配給より夜間の盗人の方が多かった。右に走り左にとんでは「すいか」した。

万一手榴弾でもとうてきされると大変だ。なかには将校

もまじっていた。「腹がへってはいくさが出来ぬ」昼の配給は二日分が二台とのことだった。自分の責任にて来る者こぼまず、悪いながらも良きことをしたと自己満足する。砲声が近づいた。

五月三十日原隊復帰命令が出た。米はまだ、なん屯もそのままだった。仙道を下降し三又路まで来た。人声がする。「ちょっとまで」、妙高山組が十余人下山して来た。不思議だ、申しあわせたように途中で合流とは、最高尾に仲良しの先任曹長がいた。共に健闘を祝しながらふもとに出た。

対岸がボネです。今その山ろくの谷も林も真黄色になって煙が立っている。米軍が黄燐弾をうちこんでいる。硫黄のはなつガスで目はあかず、呼吸もこんなんだ。ここに戦車撃滅隊がふじんしていた。山下大将に「教養ある者は真の勇者也」と言葉をたまわった。学徒兵四百人、未来の日本を背負い立つ同年輩の優秀な若者がいままさに護国の鬼となる玉碎の凶だった。

つぎのまちアリタオには軍関係各部がいた拠点だ。なかでも兵站病院には多くの戦傷者が収容されていた。病

院といっても丘や谷の樹木の茂みに携帯天幕を張って、草をしとねにして傷ついた身体を横たえている。医薬もとぼしく十分な手当てが出来ないとのことだった。

このアリタオに六月二日から砲弾がとんできだした。三日カシブに転進せよの命きたる。満州以来のいとしの自動車が使用不能となり大ハンマーで機関部をめちゃくちゃにうちこわす。自分の胸に穴のあく思いだった。

ビノンの峠をこしていくので峠のうえに諸物資をいぢ集積した。各隊一人残留、警備で自分が残った。この時マラリヤで発熱したためここに一週間ほどいた。各隊協力したがこれも水利悪く、かなりしたの方まで水くみにいった。

カシブへは十二時間歩いて到着した。身はへとへとだったが、仲良しの友が看護してくれた。飯盒に一杯肉を炊いてくれ、これを満腹になるほど食った。むしろに眠くなり横になる。めざめると戦友が駄目だと思つて穴を掘る準備をしていたという。病死する者は必ず二日ほど寝て、めざめぬまま呼吸が止まっている。私も二日間寝ていたので最後と戦友が思ったのだろう。ところが

一変して身は骨皮とやせおとろえているが、体内にはなにか一杯力があふれみなぎっている。これが氣力か精神力だ。

一か月糧秣収集にあけられた。戦友が二人たおれている。介抱と食料に氣をつかった。小さな盆地の寒村に一個師団（7割減）もいては全員餓死だ。

七月十四日北東ビナバガンに転進命令が出た。一週間前に先発隊がいったが連絡のないまま本隊も出発した。本隊は六日で傷病者は七日の予定だった。出発第一夜より大雨になり翌日も土砂ぶりでとじこめられ二日間足どめさせられた。先発隊が道路標示をつけていたがこの雨で不明となる。軍発行の五万分の一の地図と三センチの磁石をたよりに先頭をきって出発した。この地図での一步のあやまりが原因で多数の餓死者をだすものとなった。

ジャングル、山ヒル、断崖絶壁、谷は激流、虫もなかず鳥も飛ばない千数百メートルの山岳地をさまよった。

師団長命令で先頭抜刀隊の前進は師団の前進だ。一日遅れば一日分の犠牲者が出るのだ。死に物ぐるいで前進

した。急斜面で日がくれた時はその場にて寝込むので、またにたち木や竹等をはさみこみ、手はよこの者とひもで結び、うえの木の根っこにくくりつけた。

朝めざめると、もうすこしで絶壁より落ちるところまですべっていた。そうした地点を通過して谷奥の川岸に出た。筏での川くだりも水に浮べるものなく、また激流滝ありでだめだ。支流の淵に手榴弾を投げて小魚をとった。檳榔樹の新芽、野生バナナの木の芯、根芋、ヘビ、トカゲなど生きるためにはなんでも食った。先の者がこのようにしたら後続部隊はどうなるのか、そうした考えはなく、自分の生きることのみだった。

三週間をついやして目的地ビナバガンに到着した。じつに餓鬼の転進だった。勇戦奮闘の勇者も餓鬼としてたおれてはくやんでもくやみきれぬだろう。そくざに食料を調達して援軍の出発だ。主食は唐黍で、各人二十キロほどを背負って出発した。山を三つほど越した時、あいまわしいマラリヤが再発した。いたしかたなく一人川辺によこたわり、自分の荷物は他の者に持って行ってもらった。飯盒に水をくんで頭よりかけて熱とたたかかって

いた。三日ほどした時衛生士下士が二人来た。

「君の隊に助けられた、君をみてやってくれ」

とたのまれたと注射を一本打ちキニーネをくれた。やれやれ助かった。一人でこんな状態にいることは苦しいものです。過去にも何回も祈ったが、このような時にいまだ参拝したこともない靖国神社が目についた。そしてお木山様、お国司様、先祖代々の仏様、勇がこのような状態で死にたくない。こんな犬死にさせないで下さい。と故郷の氏神様や亡きおやじさんに心で呼び、時には言葉に出して祈った。

仲良しの戦友が二人飢餓のために散った。入隊以来ズット一緒だったのに残念なことをした。一人は結婚間もなく出征した。彼は在満時代に左胸のポケットに金属製のタバコケースを入れ、中に納めた奥さんの写真を一度だけみせてくれた。家で新妻は何かを感じただろうか。数百メートルの割で一人たおれている。今一息頑張れば助かったのに。また熱帯のためか死後一週間もすれば白骨が軍服を着ているようになった。あわれだった。おかれていた部隊も逐次到着した。損耗甚だしくパレ

テ峠で大多数がさんげし、いままたここに飢餓でたおれた。少数ながら戦闘準備をととのえて武器の手入れを入念におこない、つぎなる作命を待つ。

かくして八月二十日米軍観測機飛来し一片の紙切れを投下してさる。

『皇軍兵士ニ告グ』

待望ノ平和再ビ来レリ。日本帝国ガ天皇陛下ノ命ニ依リ遂ニ連合国ト講和スルニ至ツタ事情ヲ吾々ハコノ一紙ヲ以テ諸君ニ通知ス。君達ノ気付ケル如ク吾ガ軍ノ射撃ハステニ中止サレタ、君達ハ各自ノ本部ニ集合シ將校ノ指導ニ従エ。一同ガ秩序正シク吾ガ線ニ来得ル様ソノ方法ガ講ジラレツツアル。』

『皇軍將校ニ告グ』

先ヅ部下兵士ヲ集メタル後、白旗ヲ翻ヘセル將校使節ヲ吾ガ線ニ送レ

サスレバ彼使節ヲシテ、部下兵士ヲ秩序正シク吾ガ線ニ誘導スルニ必要ナル条件ヲ持チ帰ラシム。』

右ピラをみて半信半疑だった、まさか、そうかも、上下ともに心情複雑だった。

九月〇日

尚武作命 甲 第二〇〇三号

尚武集団命令 八月二十九日一七〇〇 大和

一、大命ニ依リ予ハ即時、戦鬪行動ヲ停止セントス、

昭和二十年八月二十五日〇〇〇〇ヲ以テ第十四方

面軍ニ付スル作戦任務ヲ解除セラル。

二、略

三、略

四、略

尚武集団長 山下 奉 文

鉄兵団の任務、いや私自身の任務は終わった。銃の御紋章をこのままで敵に渡すことは出来ないとな全部消した。かくして九月十二日下山し、九月十九日ジョネスにて武装解除さる。空気の抜けた風船のような気持ちで米軍の指示にしたがった。

―後 記―

昭和二十一年十二月まで戦場犯罪者として労役に服さ

された。

比島戦記

高知県 橋 本 和 水

―玉砕を宣告された三月十五日の夜―

昭和二十年一月連合軍がルソン島のリンガエン湾に逆上陸しマニラに向かって南下しつつある、という報に接してからいくばくもへずしてマニラを占領された。マニラにそそぐパシフィック川のみなもと、ラグナ湖畔カルドナに駐留していた我々船舶部隊は、完全に制海権をうばわれたので、三月初旬、船舶部隊はすべての舟艇を爆破し、ラグナ湖に沈め、山岳部隊となり長期作戦にそなえよとの兵団長の命によりボソボソへと転進した。

昭和十九年末頃よりすでに制空権は米軍の手中にあり連日の夜間行動であった。

昭和二十年三月十二日、野口兵団の総反撃隊長であった熊沢部隊長の命により、我々宮村隊は斬込作戦に出撃